The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	柳宗悦の民芸思想の研究
Author(s)	李, 炳男
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44472
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【30】

氏　　名	李（リ）　炳（ビョン）　男（ナム）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　１７１８９　号
学位授与年月日	平成 14 年 4 月 11 日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学　位　論　文　名	**柳宗悦の民芸思想の研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　神林　恒道 （副査） 教　授　上倉　庸敬　　助教授　藤田　治彦

論文内容の要旨

柳宗悦といえば、「民芸運動」の創始者として知られるが、その初期においては「白樺派」の同人の一人として、西欧の美術や文化の紹介に努めてきた。柳がそこから転じて、「民芸」に関心を抱くようになった重要なきっかけの一つとして、浅川伯教、巧の兄弟を通じて知った李朝陶磁との出会いがあった。本論は柳宗悦の「民芸思想」が、どのような過程を経て形成されていったかを、その生涯の思想にわたって検証するとともに、民芸運動を通じて柳が果たした役割を、とくに韓国の美術との関連で論じようとしたものである。

本研究は、序章を含めて四章から構成されている。「序章　柳宗悦の民芸思想－『宗教・科学・芸術』」では、柳の思想形成の基盤となった、科学としての心理学研究、さらにこの問題を内面的に深めた宗教への関心が論じられる。そこから生まれたものが、『神に就いて』などの、柳の一連の宗教哲学研究の著作であるが、これと柳のもう一つの柱である芸術への関心が相互にいかに結びつくものであったかが説かれている。「第一章　柳宗悦の民芸思想の形成」は「㈠日本近代美術における白樺派の役割」、「㈡柳宗悦と『白樺』」、「㈢民芸思想の形成期における柳宗悦」の三節からなっている。白樺派が目指したのは、何よりも旧来の伝統や因習から自らを解放すべく、規範として求めた西欧近代の文化、芸術思想の紹介であった。雑誌『白樺』の同人として、柳がとくに力を入れたのは、武者小路実篤、児島喜久雄とともに筆を振るった西欧美術の紹介と評論であった。その中でも注目されるのが、日本において最初に「ポスト印象派」を紹介した「革命の画家」の評論である。そこに表れているのは「天才主義」の称揚である。これは後の「民衆的工芸」を主張した柳の姿勢と真っ向から対立するものである。「第二章　韓国における柳宗悦の民芸思想の受容と展開」もまた、「㈠柳宗悦の民芸思想とその美学」、「㈡柳宗悦による韓国民芸の発見」、「㈢柳宗悦の韓国美術観『悲哀の美』に対する批判と展開」の三節からなっている。ここで論者は、初期の西洋的な精神あるいは美への傾倒から、いかにして東洋的なものへの回心がなされたかを論じ、さらに美的直観と宗教的直観を不即離の関係において眺めてきた柳の思想が、いかに「民芸思想」として結晶するに至ったかを明らかにしようとしている。この回心の重要な契機として指摘されるのが、柳の李朝の陶磁器との出会いである。論者はそこから、柳が韓国の美術を貫くものとして捉えた「悲哀の美」について、これを批判的に分析している。「第三章　柳宗悦と韓国の民画」は「㈠柳宗悦による韓国の民画の位置づけ」と「㈡韓国の民画の伝統と可能性」の二節からなっている。この章では、柳の再発見によって近年、韓国でもようやくその評価が高まりつつある「民画」を、その歴史的な伝統にさかのぼって検討を試みている。

論文審査の結果の要旨

柳宗悦は、当時の朝鮮においてほとんどその価値が認められることのなかった李朝の陶磁器を通じて、韓国あるいは朝鮮の美術の本質が何たるかを見出し、これを世に知らしめた人物として、今日の韓国においてもなおその評価は高い。しかしその評価には愛憎相半ばするものがある。なかでも柳のいわゆる「悲哀の美」については、むしろ反発する傾向が強い。そこには日本の植民地支配から脱した、戦後のナショナリズムの昂揚からする、偏った見方が見受けられるのであり、しかもまた柳の思想を、もっぱら「民芸運動」の視点からしか捉えていないと、論者は批判するのである。

論者は自ら韓国人研究者として、偏らない公平な視点から「柳宗悦の民芸思想」がいかなるものであったかを改めて提示しようとしている。そのためには、あえて「白樺」の時代にまで遡及して、柳の初期思想がどのように形成されたか、またそれが民芸思想の展開にどのような影響を及ぼし続けたかを、緻密に分析している。論者がそこに見出したのは、まず美的直観と宗教的直観を不即離の関係において眺める見方であり、ここから柳の民芸思想の根底をなす、他力門の「仏教美学」が形成されていったと論じている。次の問題は、西洋的な美からいかにして東洋的な美へと、柳の関心が移っていったかということである。そこで論者は、その決定的な要因となったのが、浅川兄弟との出会いを通じて知った韓国の民衆の美術であったと述べている。韓国側からの新資料を駆使して論者は、この可能性を詳しく論証しようと試みている。また柳の民芸思想についての韓国における批判も、これまでわれわれの側からはほとんど知ることのなかったものであり、柳の思想を国際的にどのように評価すべきかを、今後考えていく上できわめて参考になる。これらの問題を熱気を込めて論じた第二章が、本研究のクライマックスであり、高く評価されなければならない部分であろう。第三葦のいわゆる「朝鮮民画」と柳の関わりも、これまで知られていなかった問題であり、現代韓国での民画ブームの状況と相まって興味を引かれる。

だが柳の回心の契機を探るに、韓国の美術の影響をやや一方的に強調しすぎたきらいがある。たとえば、日本の民衆の心から生まれた美術、木食仏などから触発された事実も見逃せないのであり、これらの事柄にも公平に言及してほしかったようにも思える。しかし、この韓国の研究者によって、批判的な観点から論じられた「柳宗悦論」は、きわめて貴重な研究であり、真に国際的な評価に耐えうる優れた論文である。よって本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものであると認定する。